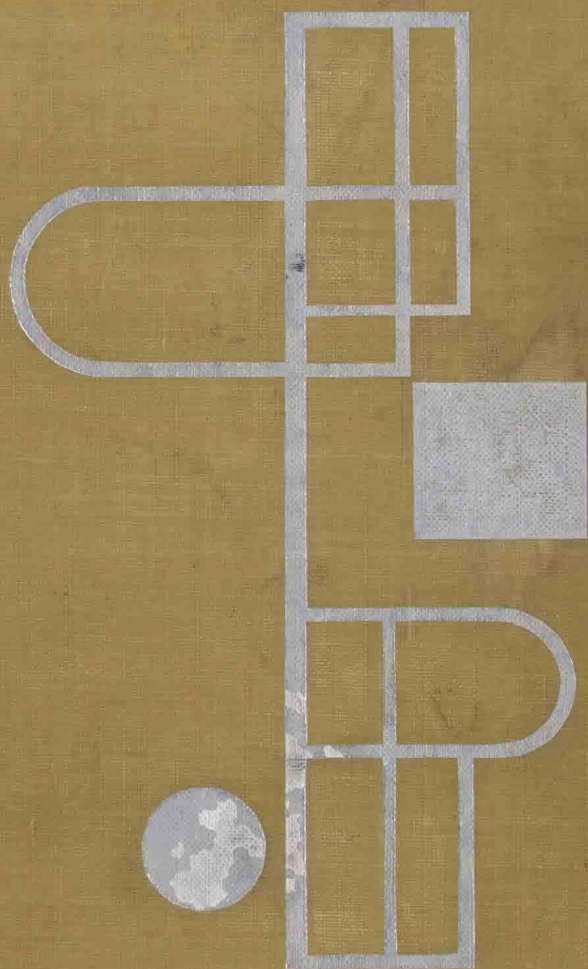


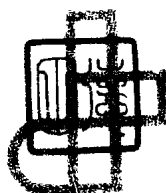


德田秋聲 集

現代日本文學全集

10

筑摩書房版



德田秋聲集

昭和三十年二月二十日 印刷
昭和三十年二月二十五日 發行

著者 德田秋聲

發行者 古田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 多田 基
東京都新宿區改代町二三

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

(電話)東京二九局(29)七六五一(代巻)
振替東京一六五七六八

整版株式會社 精興社
印刷多田印刷株式會社
製本株式會社 高陽堂

徳田秋聲集 目次

新世帯 五

爛 三〇

あらくれ 六六

或賣笑婦の話 五四

蒼白い月 六二

花が咲く 六七

風呂桶 七二

町の踊り場 七四

チビの魂 八〇

のらもの 九〇

假裝人物	100
------	-----

縮圖	三七
----	----

德田秋聲論（廣津和郎）	三六
-------------	----

解説	四九
----	----

年譜	四六
----	----

裝幀 恩地孝四郎

德田秋聲集

小林小くまは

森に
人あり

小六目

程

新世帯

新吉がお作を迎へたのは、新吉が二十五、お作が二十の時、今から丁度四年前の冬であつた。

十四の時豪商の立志傳や何かで、少年の過敏な頭腦を刺激され、東京へ飛出してから十一年間、新川の酒問屋で、傍目もふらず減茶苦茶に働いた。表町で小さい家を借りて、酒に醬油、新に炭、鹽などの新店を出した時も、飯喰ふ隙も惜しい位クル／＼と働き詰めで居た。始終襦袢がけの足袋靴のまゝで店頭に腰かけて、モクモクと氣忙しさうに飯を掻ッ込んでゐた。

新吉は一寸好い標致である。面長の色白で、鼻筋の通つた、口元の優しい男である。ビジネスカットとか云ふのに刈込んで、襟の深い毛糸のシャツを着て、前垂懸で立働いて居る姿にすら、何處となく品があつた。雪の深い水の清い山國育と言ふことが、皮膚の色澤の優れて美しいのでも解る。

お作を周旋したのは、同じ酒屋仲間の和泉屋と云ふ男であつた。

「内儀さんを一人世話しませう。好いのがあり

ますぜ。」と和泉屋は、新吉の店が如何か成立ちさうだと云ふ目論見のついた時分に口を切つた。

新吉は直ぐには話に乗らなかつた。

「まだ海のものとも山のものとも知れぬいんだからね。此なら大丈夫屋臺骨が張つて行けると云ふ見越がつかんことにや私ア不安心で、逆も鼻など持つ氣になれやしない。鼻アを持ちや、子供が生れるものと覺悟せんけアなんねえしね。」と其淋しい顔に、不安らしい笑を浮べた。

けれども新吉は、其必要は感じて居た。註文取に歩いて居る時でも、洗湯へ行つて居る間でも、小僧ばかりでは片時も安心が出来なかつた。帳合や、三度々々の飯も、自分の手と頭とを使はなければならなかつた。新吉は、内儀さんを貰ふと貰はないとの經濟上の得失などを、深く綿密に考へて居た。一々算盤珠を弾いて、口が一つ殖えれば如何、二年経つて子供が一人産れれば如何なると云ふこと迄、出来るだけ詳しく積つて見た。一年の店の利益、貯金の額、利子なども最少額に見積つて、間違のない處を、略見極をつけて、幾年目に何れだけの資本が出来ると云ふ勘定をすることぐらゐ、新吉に取つて興味のある仕事はなかつた。

三月ばかり、内儀さんの問題で、頭腦を悩まして居たが、矢張貰はずにはゐられなかつた。

お作は其頃本郷西片町の、或官吏の屋敷に奉公して居た。

産は八王子のずつと手前の、或小さい町で、

叔父が傳通院前に可成な鰻節屋を出して居た。新吉は、或日わざ／＼汽車で乗出して女の産在所へ身元調べに行つた。

二

お作の宅は、其町の可成大きな荒物屋であつた。鍋、桶、瀬戸物、シャボン、塵紙、草履と云つた物をコテ／＼と駢べて、老舗と見えて、斷んだ太い柱がツル／＼と光つてゐた。

新吉は直ぐ近處の、怪しげな暗い飲食店へ飛込んで、チビ／＼と酒を呑みながら、女を捉へて、荒物屋の身上、家族の人格、土地の風評などを、抜目なく訊糾した。女は油くさい島田の首を突出しては、酌をして居たが、知つて居るだけのことは話してくれた。田地が少しばかりに、小さい物置同様の、倉のあることも話した。兄が百姓をして居て、弟が土地で養子に行つて居ることも話した。養蠶時には養蠶もするし、其方此方へ金の時貸などをして居る事も辯つた。新吉自身の家柄との權衡から云へば、餘りドツとした縁邊でもなかつた。新吉の家は、今は悉皆零落して居るけれど、村では筋目正しい家の一つであつた。新吉は七八歳まではお坊ちゃんで育つた。親戚にも家柄の家が澤山ある。物は亡しても、家の格は然迄低くなかつた。

けれど、新吉は其様なことには餘り頓着しなかつた。自分の今の分際では、それで十分だと考へた。

其事を、同じ村から出てゐる友達に相談して

から、新吉は漸く談を進めた。見合は近間の寄席ですることにした。新吉は其友達と一緒に、和泉屋に連れられて、不斷着のまゝでヒヨコヒヨコと出掛けた。お作は薄ッぺらな小紋縮緬のやうな白ッぽい羽織のうへに、シヨールを着て、叔父と田舎から出てゐる兄との真中に、少し顔を斜にして坐つて居た。叔父は毛むくじやらの様な顔をして、古い二重廻を着てゐた。兄は菱なりの様な顔の口の大きい男で、此も綿ネルのシヤツなど着て、土くさい様子をして居た。横向きであつたので、新吉は女の顔を能く見得なかつた。色の白い、丸ぼちゃだと云ふ事だけは解つた。お作は人の肩越に、ちよいと新吉の方へ目を忍ばせてゐたが、新吉は胸がワク／＼して、頭腦が酔つたやうに爲つてゐた。

寄席を出るとき、新吉は出てゆくお作の姿をチラリと見た。お作も振顧つて、正面から男の立姿を二三重熟視した。お作は小柄の女で歩く様子などは、坐つて居るよりも多少好いやうに思はれた。

其處を出ると、和泉屋は不恰好な長い二重廻の袖をヒラ／＼させて、一歩先にお作の仲間と一緒に歸つた。

「如何だい、どんな女だい。」と、新吉は私と友達に訊いた。

何だか頭腦がボツとして居た。叔父や兄貴の百姓々々した風體が、何となく氣に懸つた。でも厭で堪らぬと云ふ程でもなかつた。

三

明日は朝早く、小僧を註文取に出して、自分は店頭で精々と樽を洗いである、まだ日影の薄ら寒い街を、急々と此方へやつて来る男がある。柳原ものの、薄ッぺらな、例の二重廻を着込んだ和泉屋である。

和泉屋は、羅紗の硬さうな中折帽を脱ぐと、軽く挨拶して、其まゝ店頭へ腰かけ、氣忙しさに帶から食入を抜いて其を吸出した。

「君の評判は大したもんですぜ。」和泉屋は突如に高聲で辯り出した。「先方ぢやもう悉皆氣に入つちやつて、何が何でも一緒に爲たいと云ふんです。」

「冷評しちや可ませんよ。」と新吉は矢張ザクザク遣つてゐる。氣が氣でないやうな心持もした。

「いや眞實ですよ。」和泉屋は反身になつて、其で話は早い方が好いからツてんで、今日にでも日取を決めてくれると云ふんですがね、如何です、女も決して悪い方ぢやないでせう。」

和泉屋は、其から女の身上持の好いこと、氣立の優しい事などをベラ／＼と説立てた。星氣や相性のことも辯じて、獨で呑込んでゐた。支度は素より有らう筈はないけれど、其でも好かれ悪しかれ、簞笥の一棹位は持つて来るだらう。夜具も一組は持込むだらう。左に右貰つて見給へ、同じ働くにも、如何に張合があつて面白い。あの女なら請合つて新のお釜を興し

ますと、小汚い齒齦に泡を溜めて説勧めた。

新吉は帳場格子の前の處に腰かけて、何やら物足りなさうな顔をして聽いてゐたが、「ぢや貰はうかね。」と首を傾げながら低聲に言つた。「だが、来て見て、吃驚するだらうな。何ほ何でも、豈夫こんな亂暴な宅だとは思ふまい。けど、まあ可いや、君に任しておくとしませう。逃出されたら逃出された時のことだ。」

「其様なもんぢや有りませんよ。物は試し、まあ貰つて御覽なさい。」

和泉屋は欣々のもので歸つて行つた。其から七日ばかり経つた或晩、新吉の宅には、色々の人が多勢集つた。前の朋輩が一人、小野と云ふ例の友達が一人——此は殊に朝から詰めかけて、部屋装飾や、今夜の料理の指揮などしてくれた。障子を張替へたり、何處から安い懸物を貰つて来てくれたなどした。新吉の着るやうな斜子の羽織と、何やらクタ／＼の袴を借りて来てくれたも小野である。小さい口錢取などして、小才の利く、世話好の男である。

料理の見積を此男が爲てくれた時、新吉は優しい顔を齧めた。

「どうも困るな、こんな取清身上で、其様な贅澤な眞似なんか爲れちや……何だか知んねえが、其引物とか云ふ物を廢さうぢやねえか。」

四

小野は怒りもしない。愛嬌のある丸顔に笑を漂べて、「然う言ふことを言ひなさんな。一生

に一度ぢやないか。此様な物を節約したからつて、何程も違ふものぢや有りやしない。第一見窄せましくて可いけないよ。」

「でも君、私ア眞實まじつの處ところ酷ひど苦く面めんして婚禮こんいするんだからね。何も苦しい思おもをして、虚榮きやうを張る必要もなからうぢやないか。ね、小野君私ア然しかう云いふ主義しゆぎなんだぜ。君等のやうに懷手わいすして好い錢儲ぜにぞろの出来る人たア少し違ふんだからね。」

「理窟りくつは理窟りくつさ。」と小野は笑顔を放はなさず、「他の場合と異ふんだから、少しは世間體よかんたいで云ふことを考へなくぢや……好いぢやないか、後でミツチリ二人で稼かせげば。」

新吉は黒い指頭さしゆづに、臭い莫もを摘つまんで、眞鍮しんそうの煙管えんくわんに詰めて、炭の粉を埋けた鐵瓶てつびんの下で火を點けると、思案しあん深い目容めようをして、濃い煙を噴いてゐた。

六疊の部屋には、もう總桐の簞笥だんしが一棹さく据すゑられてある。新しい鏡臺きやうだいも其上に載せてあつた。借りて來た火鉢かひつ、黄綃わうしやうの座蒲團ざぼたんなどが、赫い疊の上に積んであつた。丁度晝飯を濟したばかりの處で、耳の遠い傭婆やうばさんが臺所だいしよで其後始末をしてゐた。

新吉はまだ何やらクド／＼云つて居た。小野の見積書みせがしを手を取つては、獨で胸算用むねざんようをしてゐた。此處へ店を出してから食ふ物も食はずに、少許宛溜せうしよわんりゅうめた金が、既う三四十もある。其を此際大略噴出せうりやくふんしゅつしてはねばならぬと云ふのは、新吉に取つて些と苦痛くるつうであつた。新吉は愁しううした大業だいぎやうな式を擧げる意はなかつた。竊ひそと興入きやうにゅうをし

て、私わたしと儀式を濟す筈であつた。強おとち金かねが惜しいばかりではない。一體が、目に立つやうに晴はらしいことや、華やかなことが、質素な新吉の性に適あはなかつた。人の知らない處で働いて、人に見着みからない處で金を溜めたいと云ふ風であつた。どれだけ金を儲けて、何れだけ貯金ちきんがしてあると云ふことを、人に氣取られるのが、既に好い心持ではなかつた。獨立心どくりつしんと云ふやうな、個人主義こじんしゆぎと云ふやうな、妙な偏つた一種の考かんがひが、丁稚奉公ていしほうこうをしてから以來彼の頭腦づなうに強く染込んで居た。小野の干涉せんとしは、彼に取つては、餘り心持好くなかつた。と言つて、此男が無くしては、此場合、彼は幾ど手が出なかつた。グズグズ言ひながら、分斷反抗ぶんたんはんかうする事も出来なかつた。

三時過になると、彼は床屋どやに行つて、其から湯に入つた。歸つて來ると、家はもう明あかりが點いてゐた。

新吉は、「ア、」と言つて、長火鉢ながかひつの前に坐つた。小野は自分の花嫁かよめでも來るやうな晴々しい顔をして、「如何だ新さん待遠まちとほしいだらう。茶ちやでも淹ひれようか。」

「莫な迦言なごひたまへ。」新吉は淋しい笑方わらかたをした。

五

するうち綺麗に磨みが立てられた臺ランプが二臺、狭苦しい座敷に點みされ、火鉢や蒲團ぼたんも整然と駢ならべられた。小さい鳥臺とりだいや、鉢子はちこ、盃さかずきなども、何時の間にか淺い床に据ゑられた。臺所だいしよから、料

理りが持込まれると、耳の遠い婆さんが、旋まわて一叮嚀ていねいに拭いた膳ぜんの上に并べて、其から見事な蝦えびや蛤かきを盛つた、竹の色の青々した引物の籠かごをも、ズバリと茶の室へ并べた。小野は新聞紙を引裂いては、埃の被らぬやうに、御馳走ごちそうの上に被せて行いてゐた。新吉は氣が騒さわ々して來た。切立きりだての銘撰めいせんの小袖こそでを着込んで、目眩めくらしいやうな目容めようで、彼方へ行つて立つたり、此方へ來て坐つたりしてゐた。

「サア、此で此方の用意は悉皆しつぱい出来揚つた。何時お出でなすつても差さ間ないんだ。マア一服しよう。」と蜻蛉せうりやうの眼めのやうに頭を光らせながら、小野は座敷の眞中に坐つた。

「イヤ御苦勞々々々。」と新吉も外の二人と一緒に傍に坐つて、頭を掻きながら、「私わたしア如何も斯なん様な事にや一向慣れねえもんだからね……。」と分疏ぶんそしてゐた。

「何に、僕だつて、何を知つてるもんか、出鱈でたら目めさ。」と笑つた。

「今夜はマア疲直つかぢしに大いに飲んでくれ給へ。君が第一のお客様なんだからね。」

新吉は此晴々しい席に、親戚の者と云つては、唯の一人も無いのを、何だか頼なくも思つた。如何か愁しううか此まで漕こぎつて來た、長い年月の苦勞を思ふと、迂廻うゐくねつた小徑せうけいを色々に歩いて、廣い大道へ出て來たやうで、昨日までのことが、夢のやうに思はれた。是からが責任が重いんだと云ふ感激もあつた。明るい、神々しいやうな燈火が、風もないのに眼先に揺いて、

新吉の眼には涙が浮んで来た。花のやうな自分の新妻が、不思議の縁の絲に引かれて、天上からでも降りて来るやうな感じもあつた。

「然しもう來さうなものだね。」と小野は膝のうへで見てゐた新聞紙から目を離して、「ひどく思はせ振だな。」と生欠をした。

「然うですね。」

「けど、まだ暮ればかりですもの。」と他の二人も目を見合せて、伸上つて、店口を覗いた。店は入口だけ残して、後は閉切つてある。小僧は火の氣のない帳場格子の傍に坐つて、懷手をしながら、コクリ／＼居睡をして居た。時計が丁度七時を打つた。

小野と新吉とが、間もなく羽織袴を着けて坐直した時分に、靜かな宵の町をゴロ／＼と腕車の響が、遠くから聞え出した。

「ソレ来た！」

小野は新吉と顔を見合つて起上つた。他の兩人も新吉も何と云ふことなし起上つた。

新開の暗い街を、鈍く曳いて来る腕車の音は、何となく物々しきかつた。

四人は店口に肩を駢べ合つて、暗い外を見透してゐた。向の鹽煎餅屋の軒明が、暗い廣い街の片側に淋しい光を投げて居た。

六

新吉が胸をワク／＼させてゐる間に、五臺の腕車が、店先で揺棒を卸した。眞先に飛降りたのは、足の先ばかり白い和泉屋であつた。續い

て降りたのが、丸髷頭の短い首を据ゑて、何やら淡色の紋附を着た和泉屋の内儀さんであつた。三番目に見榮のしない小艇のお作が、ひよっこりと降りると、其後から、叔父の連合だと云ふ四十許りの女が、黒い吾妻・コートを着て、「ハイ、御苦勞さま。」と軽い東京辯で、若衆に聲かけながら降りた。兄貴は黒い鍔廣の中折帽を冠つて、股をしてゐた。

和泉屋は小野と二人で、一同を席へ就かせた。氣爽らしい叔母は些と垢脱のした女であつた。眉の薄い目尻の下つた、ボチャ／＼した色白の顔で、愛嬌のある口元から金齒の光が洩れてゐた。

「ハイ、これは初めまして……私は此の叔父の家内でございまして、實は此のお袋が生憎二三日加減が悪いとか申しまして、其で今日は私が出ましたやうな譯で、萬望まあ何分宜しく……」此度は又不束な者を差上げて……とだら／＼と叔母が口誼を述べると、續いて兄もキウツツ張つた調子で挨拶を済した。

前は少時森として、蒼い夏の煙が、人々の目の前を漂うた。正面の右に坐つた新吉は、テラテラした頭に血の氣の美しい顔、目のうちにも優しい潤みを有つて、腕組したまゝ、堅くなつてゐた。お作は薄化粧した顔をボツと紅くして、俛いてゐた。坐つた膝も詰り、肩や胸のあたりもスツとした方ではなかつた。結立の島田や櫛笄も、夷けたやうな頭には何だか、持つて來て載せたやうにも見えた。でも、取澄した氣振は

少しも見えず、折々表情のない目を擧げて、何處を見るものもなく瞋めると、目眩しさうに又伏せてゐた。

和泉屋と小野は、袴をシュッ／＼云はせながら、狭い座敷を出たり入つたりして居たが、するうち銚子や盃が運ばれて、手輕な三々九度の儀式が済むと、赤い盃が二側に居並んだ人々の手へ順々に廻された。

「お愛でたう。」と云ふ聲と一緒に、多勢が一齊にお辭儀を爲合つた。

新吉とお作の顔は、一様に熱つて、目が美しく輝いてゐた。

七

盃が一順廻つた時分に、小野が何處からか引張つて來た若い譚謳ひが、末座に坐つて、突然突拍子な大聲を張揚げて、高砂を謳出した。同時にお作が次の間へ着換に起つて、人々の前には鶴が運ばれ、陽氣な笑聲や、話聲が一時に入亂れて、猪口が盛に其方此方へ飛んだ。

「サア、お役は済んだ。此から飲むんだ。」和泉屋が言出した。

新吉も席を離れて、「私の處も未だ眞の取替身の上で、御馳走と言つちや何もありませんが、酒だけア澤山有りますから、萬望マア御ゆつくり。」

「イヤなかな御鄭重な御馳走で……。」と兄貴は大きい掌に猪口を載せて、莫迦町囃なお辭儀をして、新吉に差した。「私は田舎者で、何に

も知らねえもんでござえますが、何分切望よろしく。」

「イヤ私こそ。」と新吉は押載いて、「何しろ未だ世帯を持ったばかりでして……加之私ア此方には親戚と云つては一人も無えもんですから、是でなか／＼心細いです。マア一つ皆さんのお心添で、一人前の商人になるまでは、眞黒になつて稼ぐ心算です。」

「飛んでもないこつて……。」と兄貴は返盃を兩手に受取つて、「此方とらと違えまして、伎倆がおりなざるから……。」

「オイ新さん、さう饒儲の話ばかりしてゐねえで、些とお飲りよ。」と小野は向側から高調子で聲かけた。

新吉は駄が悪さうに振顧いて、淋しい顔に笑を浮べた。「笑談ぢやねえ。明日から頭數が一人殖えるんだ。放心しぢやあらんねえ。」と低聲で言つた。

「イヤ、世帯持は其心懸が肝腎です。」と和泉屋は、叔母とシミ／＼何やら、談してゐたが、此時口を容れた。「此處の家へ来た嫁さんは何しろ幸ですよ。男ッ振は好し、伎倆はあるしね。」

「然うでございますとも。」と叔母は楊枝で金齒を弄りながら、愛想笑をした。

「これでお内儀さんを可愛がれア申分なした。」と誰やらが混交した。

銚子が後から／＼と運ばれた。話聲が愈高調子になつて、狭い座敷には、酒の香と眞の煙とが、一杯に漂うた。

「花嫁さんは如何した／＼。」と誰やらが不平さうに喚いた。

和泉屋が次の間へ行つて見た。お作は何やら絲織の小袖に着換へて、派手な花簪を挿し、長火鉢の前に、灯影に背いて、侘いたま／＼子然と坐つてゐた。

「サアお作さん、彼處へ出てお酌しなけア可ない。」

お作は顔を赧め、締のない口元に皺を寄せて笑つた。

ハ

小野が少し食醉つて管を捲いたくらゐで、九時過に一同無事に引揚げた。叔母と兄貴とは、紛擾のなかで、長たらしく挨拶して居たが、出る時兄貴の足はふらついて居た。新吉側の友人は、一時飲直してから暇を告げた。

「ア、人の婚禮であゝ騒ぐ奴の氣が知れねえ。」と云ふ様に、新吉は酔の退いた蒼い顔をしてグツタリと床に就いた。

明朝目を覺すと、お作はもう起きてゐた。枕頭には綺麗に火入の灰を均した炭盆と、折目の崩れぬ新聞が置いてあつた。曉から較雨が降つたと見えて、軽い雨滴の音が、眠を食つた頭に心持よく聞えた。豆屋の鈴の音も濕氣を含んでゐた。

何だか今朝から不時な荷物を背負はされたやうな心持もするが、店を持つた時も同じ不安のあつたことを思ふと、唯先が少し暗いばかりで、

暗い中にも光明はあつた。床を離れて茶の間へ出ようとする、ひよつこりお作と出會つた。

お作は瓦斯絲織の不斷着に赤い襟をかけて、顔は下手につけた白粉が斑つくつて居た。

「オヤ。」と言つて赤い顔を愧いて了つたが、

新吉は嬉然としなないで、其儘店へ出た。店には近所の貧乏町から女の子供が一人、赤子を負つた四十許りの婆が一人、炭や味噌を買ひに來てゐた。

新吉は小僧と一緒に、打つて變つた愛想の好い顔をして元氣よく商をした。

朝飯の時、初めてお作の顔を熟視することが出来た。狭い食卓に、昨夜の残の御馳走などを駢べて、差向で箸を取つたが、お作は折々目をあげて新吉の顔を見た。新吉も飯を盛る横顔を熟と瞞めた。寸法の詰つた丸味のある、鼻の小さい顔で額も迫つてゐた。指節の短い手に何やら石入の指環を嵌めてゐた。飯が濟むと、新吉は急に氣忙しさうな様子で、二三服氣を吸つてゐたが、旋て臺所口で飯を食つて居る傭婆さんに大聲で口を利き出した。

「婆さん、此間から話して置いたやうな譯なんだから、私の處はもう可いよ。婆さんの都合で暇を取るのは何時でも介意はねえから……。」

婆さんは味噌汁の椀を下に置くと、「ハイハイ。」と二度ばかり頷いた。

「でも今日はまあ、何や彼や後片付もございますし、貴女もお出でになつた早々から水弄も何でせうからね……。」とお作に笑顔を向けた。

「己ン處ア其様なこと言つてる身分ぢやねえ。今日からでも働いて貰はなければならんねえ。」と新吉は愛想もなく言つた。

「ハア切望！」とお作は低聲で言つた。

「オイ増藏、何を茫然見てゐるんだ。サツサと飯を食つちまひねえ。」と新吉はブイと起つた。

九

午前のうち、新吉は二三度外へ出ては急々と歸つて來た。小僧と同じやうに鹽や、木端を得意先へ配つて歩いた。岡持を肩へかけて、少許の醬油や酒をも持廻つた。店が空きさうになると、「ちよッ爲様がないな。」と舌打して奥を見込み、「オイ、店が空くから出てみてくん。」とお作に聲をかけた。お作は顔や頭髮を氣にしながら、極惡さうに帳場の處へ來て坐つた。

新吉は昨夜來たばかりの花嫁を捉へて、醬油や酒の好惡、値段などを教へ始めた。

「此邊は貧乏人が多いんだから、皆細い商ばかりだ。お客は七八分労働者なんだから、酒の小賣が一番多いのさ。店頭へ來て、榊飲を極込む輩も、日に二人や三人はあるんだから、然う云ふ奴が飛込んだら、此處の呑口を怎う捻つて、榊ごと突出してやるんさ。彼奴等擲鹽が何かくて、グイ／＼引かけて去かア。宅は新店だから、帳面の外貨は一切爲ねえと云ふ極なんだ。」と其から賣場のつけ方なども、一通り口早に教へた。お作は唯ニヤ／＼笑つて居た。解つたのか、解らぬのか、新吉は括かしく思つた。で、碌素法、

莫も吸はず、岡持を擲出して、又出て行つて了ふ。

晩方少し手隙になつてから、新吉は質素な晴着を着て、古い烏打帽を被り、店をお作と小僧とに託けて、和泉屋へ行くと言つて宅を出た。

お作は後で物としてゐた。優しい顔に似合はず、氣象はなか／＼烈しいやうに思はれた。無口なやうで、何でも彼でも浚け出す所が、男らしいやうにも思はれた。昨夜の羽織や袴を疊んで簞籠に仕舞込まうとした時、「其奴は小野が、餘所から借りて來てくれたんだから……。」と低聲に云つて風呂敷を出して、自分で叮嚀に包んだ、虚榮も人前もない様子が、何となく頼もしいやうな氣もした。初めての自分には、胸がドキリとする程荒い言をかけることもあるが、心持は空竹を割つたやうな男だとも思つた。此店も二三年の中には、グツと手廣くする心算だから……と、昨夜寝てから話したことなども憶出された。自分の宅の一つも建てたり、千や二千の金の出来る迄は、目を瞑つて辛抱してくれろと云つた言を考出すとお作は唯思ひがけないやうな切ないやうな氣がした。此五六日の不安と動搖とが、懈い體と一緒に溶合つて、嬉しいやうな、果敢ないやうな思が、胸一杯に漂つてゐた。

お作は机に肘を突いて、恍然と廣い新開の町を眺めた。淡い冬の日は折々曇つて、寂しい影が一體に行遍つてゐた。凍んだやうな人の姿が夢のやうに、往來してゐる。お作の目は潤んで

ゐた。まだ明瞭した印象もない新吉の顔が、何か知らず朦朧した輪のやうな物の中から見えるやうであつた。

+

幸福な月日は、滑るやうに過去つた。新吉は結婚後一層家業に精が出た。其働振には以前に比して、多少用意とか思慮とか云ふ餘裕が出来て來た。小僧を使ふこと、仕入や得意を作ることも巧みになつた。體を動かすことが、比較的少くなつた代りに、多く頭腦を使ふやうな傾きもあつた。

けれど、お作は何の役にも立たなかつた。氣立が優しいのと、起居が嫺かなのと、物質上の欲望が少いのと、唯其だけが此女の長所だと云ふことが、愈明かに爲つて來た。新吉が出て了ふと、お作は良人に吩咐かつたことの外、何の氣働きも機轉も利かすことが出来なかつた。酒の割法が間違つたり、高い醬油を安く賣ることなどは稀しくなかつた。帳面の調や、得意先の様子なども、一向に呑込めなかつた。呑込まうとする氣合も見えなかつた。

其様なことが幾度も重なると、新吉は憤々として怒つた。

「此奴は餘程間拔けだな。商人の内儀さんが、其様なこつて如何するんだ。三度々々の飯を何處へ食つてやがんだ。」

優しい新吉の口から怎う云ふ言葉が出るやうに爲つた。

お作は赤い顔をして、唯ニヤ／＼と笑つてゐる。

「ちよッ、爲様がねえな。」と新吉は憤れつたさうに、顔を曇らせる。「己ア飛んだ者を背負込んぢやつたい。全體和泉屋も和泉屋ぢやねえか。友達效に、少しは何とか目口の明いた女房を世話するが可いや。媒介口ばかり利きあがつて……此ぢや人の足元を見て押附ものをしたやうなもんだ。」とブツ／＼零してゐる。

お作は、泣面かきさうな顔をして、術なげに俛いて了ふ。

「明日から引込んでるが可い。店へなんぞ出られると、反つて家業の邪魔に爲る。奥でおん襦袢でも綴くつての方が猶しも優だ。此位のこと勤まらねえやうちや、何處へ行つたつて勤まりさうな譯がない。それで能くお屋敷の奉公が勤まつたもんだ。」

罵る新吉の舌には、毒と熱とがあつた。

お作の目から、ポロ／＼と熱い涙が零れた。「私は莫迦ですから……。」とおど／＼する。

新吉は急に黙つて了ふ。而してフカ／＼と眞を喫す。筋張つたやうな顔が蒼くなつて、目が酔漢のやうに据つてゐる。口を利く張合も抜けて了ふのだが、胸の中は矢張煮えてゐる。

かう黙られると、お作の心は益々おど／＼する。

「此から精々氣をつけますから……。」と顔へ聲で詫びるのであるが、其言には自信も決心もなかつた。唯恐怖があるばかりであつた。

十二

こんな事のあつた後では、お作は必然奥の六疊の簞笥の前に坐込んで、針仕事を始める。半日でも一日でも、新吉が口を利けば、例の目尻や口元に小皺を寄せた、人の好きさうな笑顔を向けながら、素直に受答をする外、自分から熟んだ柿が潰れたとも言出せなかつた。

此迄親の膝下にゐた時も、三年の間西片町の或教授の屋敷に奉公してゐた時も、唯自分の出来るだけの事を正直に、眞面目にと勤めて居れば其で可かつた。親からは女らしい娘だと讃められ、主人からは氣立の好い、素直な女だと言つて可愛がられた。此家へ縁附くことになつて、暇を貰ふ時も、お前なら、必然亭主を粗末にしないだらう。世帯持も好からう。亭主に思はれるに決つてゐると、旦那様から分に過ぎた御祝儀を頂いた。夫人からも半襟や簪などを頂いて、門の外迄見送られた位であつた。新吉に頭から誹謗されると、お作の心はドマ／＼して、何が何だか薩張解らなくなつて来る。唯威張つて見せるのであらうと思はれる。故と喧しく言つて脅して見るのだらうと云ふ氣もする。あれ位なことは、今日は失敗つても、二度三度と慣れて来れば造作なく出来さうにも思へる。孰にしても、彼人の氣の短いのと、怒りつぽいのは婆やが出てゆく時、私と注意しておいてくれたのでも解つてゐる——と、お作は悠々云ふ心持で、深く氣にも留めなかつた。怒られる時は、如何

なるのかと戰々して、胸が一杯になつて来るが、其も其時限で、不安の雲はあつても、自分を悲観する程ではなかつた。

其でも針の手を休めながら、折々溜息を吐くことなどある。獨長火鉢の横に坐つて、爲る仕事のない静かな晝間などは、自然に涙の零れる事もあつた。寧ろ宅へ歸つて、舊の屋敷へ奉公した方が氣樂だなぞと考へる事もあつた。其時分から、お作は能く鏡に向つた。四下の人の影が見えぬと、私と鏡の被を取つて、自分の姿を映して見た。髪を直して、顔へ水白粉なぞ塗つて、暫く其處に恍然としてゐた。而して昨日のやうに思ふ婚禮當時の事や、其から半年餘りの樂しかつた夢を繰返してゐた。自分の姿や、陽氣な華やかな其晩の光景も、歷々目に浮んで来る。——今では然うした影も漂うてゐない。憶出すと泣出した程情なくなつて来る。

店で帳合をしてゐた新吉が、不意に「ア、」と溜息を吐いて、此も満らなさうな顔をして奥を覗きに來る。お作は赤い顔をして、急いで鏡に被をしてし了ふ。

「オイ、茶でも淹れないか。」と新吉は難しい顔をして、後へ引返す。

長火鉢の傍で一緒にになると、二人は妙に黙込んで了ふ。長火鉢には火が消えて、鐵瓶が冷くなつてゐる。

十三

お作は妙におどついて、俄に臺所から消炭を

持つて来て、星のやうな炭團の火を拾ひあげては、折々新吉の顔色を候つてゐた。

「憤れつたいな。」新吉は優しい舌敷をして、火箸を引奪るやうに取ると、自分でフウ／＼言ひながら、火を起し始めた。

「一日何をしてゐるんだな。お前なぞ飼つておくより、猫の子飼つておく方が、何のくらの氣が利いてるか知れやしねえ。」と戯談のやうに言ふ。

お作は不相變ニヤ／＼と笑つて、癩と火の起るのを睨めてゐる。

新吉は熱つた顔を兩手で撫でて、「お前なんざ、眞實に苦勞と云ふものを爲て見ねえんだから駄目だ。己なんざ、何しろ十四の時から新川へ奉公して、十一年間苦役はれて來たんだ。食物も碌に食はずに、土間に立詰だ。指頭の千斷れるやうな寒中、炭を挽かされる時なんざ、眞實に泣いっちまふぜ。」

お作は皮膚の弛んだ口元に皺を寄せて、ニヤリと笑ふ。

「此から樂すれや可いぢや有りませんか。」

「戯談ぢやねえ。」新吉は吐出すやうに言ふ。

「此からが苦勞なんだ。今迄は唯體を動かせるばかりで辛抱さへしてゐれア、其で好かつたんだが、自分で一軒の店を張つて行くことになつて見ててえと、然うは行かねえ。氣苦勞が大したもんだ。」

「其代り樂しみもあるでせう。」

「如何云ふ樂しみがあるね。」と新吉は目を丸くした。「樂しみてえ處へは、尙だ／＼行かねえ。其處迄漕ぎつけるのが大抵のことぢや有りやしねえ。其には内儀さんも毅然してゐてくれなけアならねえ。……それア己は遣る。必然やつて見せる。轉んでも唯は起きねえ。けど、お前は如何だ。お前は三度々々無駄飯を食つて、毎日々々モゾクサしてる許しぢやねえか。だから俺は働くにも張合がねえ。厭になつちまふ。」と新吉はウンザリした顔をする。

「でも、お金が残るわ。」

「當然ぢやねえか。」新吉は嬉しさうな笑を元に見せたが、直に可怖いやうな顔をする。お作が始末屋と云ふよりは、金を使ふ氣勸すらないと云ふことは、新吉には一つの氣休であつた。お作には、此處を切詰めて、此處を如何しよう

と云ふ所思もないが、其代り鏝一文自分の意志で使はうと云ふ氣も起らぬ。此處へ來てから新吉の勝手元は少し宛豐になつて來た。手廻の道具も増えた。新吉が何處からか格安に買つて來た手筆笥や風入らずがツヤ／＼光つて、着物も先一通り揃つた。保険もつければ、別に毎月の貯金もして來た。お作は唯の一度も、自分の料簡で買物をした事がない。新吉は三度々々のお茶まで幾ど自分で見繕つた。お作は唯鈍い機械のやうに引廻されてゐた。

十三

得意場廻をして來た小僧の一人が、ぶらりと歸つて來たかと思ふと、岡持を其處へ投出して、

「旦那。」と奥へ聲をかけた。

「××さんぢや酒の小言が出ましたよ。彼様水ツぽいんぢや不可いから、今度少し吟味しろつて……。今持つて行くんです。」

「吟味しろつて。」新吉は顔を顰めて、「水ツぽい譯はねえんだがな。誰が然う言つた。」

「旦那が然う言つたですよ。」

「然う言ふ譯は決してございせんつて。尤も少し辛くしろつてツたから、其心算で辛口にしたんだが……。」と新吉は店へ飛出して、下駄を突かけて土間へ降りると、何やらブツクサ云つてゐた。

店ではゴボ／＼と云ふ音が聞える。暫くすると、小僧は又出て行つた。

「碌な酒も飲まねえ辭に文句ばつかり言つてやがる。」と獨言を言つて、新吉は舊の座へ歸つて來た。得意先の所思を氣にする様子が不安さうな目の色に見えた。

お作は番茶を淹れて、其から濕つた鹽煎餅を猫板の上へ出した。新吉は何やら考込みながら、無意識にボリ／＼食始めた。お作も弱さうな齒で、ボツ／＼噛つてゐた。三月の末で外は大部分春めいて來た。裏の納屋の蔭にある櫻が、チラホラ白い葩を綻ばせて、暖い日に柔かい光があつた。外は人の往來も、何處か騒ついて聞える。新吉は何だか長閑なやうな心持もした。怎うして坐つてゐると、妙に心に空虚が出來たやうにも思はれた。長い間の疲勞が一時に出て來た故もあらう。多少物を考へる心の餘裕がついて來

たのも、一つの原因であらう。

お作は何かの話の序に、「……花の咲く時分に、一度二人で田舎へ行きませうか。」と言出した。

新吉は黙つてお作の顔を見た。

「別に見る處といつちやありませんけれど、其でも田舎は好ござんすよ。蓮華や蒲公英が咲いて……野良のボカ／＼する時分の摘草なんか、眞實に面白うござんすよ。」

「氣樂言つてらア。」と新吉は淋しく笑つた。

「お前の田舎へ行くも可いが、其よか自分の田舎へだつて、義理としても一度は行かなければねえ。」

「如何して又、七年も八年もお歸んなさらないんでせう。随分だわ。」お作は鹽煎餅の、喰着いた齒莖を見せながら笑つた。

「そんな金は何處にあるんだ。」新吉は苦い顔をする。「一度行けア一月や二月の儲けはフイになつちまふ。久振ぢや、豈夫手ぶらで歸られもしねえ。産故郷となれア、トンビの一枚も引張つて行かなければなんねえし。……第一店を如何する氣だ。」

お作は急に萎けて了ふ。

「此方や其所ぢやねえんだ。眞實だ。」

新吉はガブリと茶を飲干すと、急に立上つた。

吉

櫻の繁みに毛蟲がつく時分に、お作はバツタリ月經を見なくなつた。お作は冷え性の女であつた。唇の色も悪く、肌も綺麗ではなかつた。齒性も弱かつた。菊が移れる頃になると、新吉に嘔はれながら、裾へ安火を入れて寝た。是と云ふ病氣もしないが時々食べたものが消化れずに、上げて來ることなどもあつた。空風の寒い日などは、血色の悪い總毛立つた様な顔をして火鉢に縮かまつてゐた。少し劇しい水仕事をすると、小さい手が直に荒れて、揉手をする、カサ／＼音がする位であつた。新吉は、晩に寝るとき、滋養に濃い酒を猪口に一杯づつ飲せなごした。傳通院前に、灸點の上手があると聞いたので、其をも試みさした。

「今から其様なこつて如何するんだ。全然婆さんのやうだ。」と新吉は笑ひかけた。

お作は分疎のないやうな顔をして、其度毎に元氣らしく働いて見せた。

慙うした弱い體で、妊娠したと云ふのは、些と不思議のやうであつた。

「謙つけ。體が如何かしてゐるんだ。」と新吉は信じなかつた。

「いゝえ。」とお作は赤い顔をして、「大分前から如何も變だと思つたんです。占つて見たら然うなんです。」

新吉は不安らしい目色で、妻の顔を見込んだ。

「如何したんでせう、斯様な弱い體で……。」と云つた目色で、お作も極惡さうに、新吉の顔を見上げた。

其から二人の間に、コナ／＼した濕やかな話が始まつた。新吉は長い間、絶えず惡口を浴せかけて來たことが、今更氣の毒なやうに思はれた。全然自分の妻と云ふ考を持つことの出來なかつたのを悔いるやうな心も出て來た。つい此四五日前に、長湯をしたと云つて怒つたのが因で、アクザモクザ罵つた果に、何か厄介者でも養つてゐたやうに可悔しがつて、出て行け、今出て行けと呶鳴つたことなども、我ながら淺猿しく思はれた。

加之、妊娠でもしたとなると、何だか氣が更まるやうな氣がする。多少の不安や、厭な感じは伴ひながら、自分の生活を一層確實にする時期へ入つて來たやうな心持もあつた。

お作はもう、お産の時の心配など始めた。初着や襦袢のことまで言出した。

「私は體が弱いから、必然お産が重いだらうと思つて……。」お作は嬉しいやうな、心元ないやうな目をシヨボ／＼させて男の顔を眺めた。

新吉はいぢらしいやうな氣がした。

お作は十二時を聞いて、急に針を針さしに刺した。希しく顔に光澤が出て、目のうちにも美しい濕ひを有つてゐた。新吉は恍然した目容で、其顔を眺めてゐた。

主

お作は婚禮當時と變らぬ初々しさと、男に甘えるやうな様子を見せて、其處らに散つた布屑や絲屑を拾ふ。新吉も側で讀んでゐた講談物を閉ぢて、「サア慙うしぢアゐられねえ。」と急立てられる様な調子で、懈怠さうな身節がミリミ

り言ふほど伸をする。

「もう親父になるのかな。」と其腕を擦つてゐる。

「早いものです、全然夢のやうね。」とお作も恍然した目をして、媚びるやうに言ふ。「私のやうな者でも、子が出来ると思ふと不思議ね。」

二人は其から婚禮前後の心持などを憶出して、満ちぬことを意味ありさうに話出した。怎うした仲の睦まじい時、能く雙方の親兄弟の噂などが出る。親戚の話や、自分等の幼い折の話なども出た。

「お産の時、阿母さんは田舎へ来てゐると云ふんですけれど、家にゐたつて好いでせう。」

時計が一時を打つと、お作は想出したやうに、急いで床を延べる。新吉に寝衣を着せて床の中へ入れてから、自分は又一時、脱棄を疊んだり、火鉢の火を消したりしてゐた。

二三日は怎う云ふ風の交情が続く。新吉はツイと側へ寄つて、お作の頬に熱いキスをする事などもある。ふと思ひついて、近所の寄席へ連出す事もあつた。

が、然うした後では、直に暴風が来る。思ひがけない事から、不意と新吉の心の平衡が破れて来る。

「……少し甘やかしておけア、もう此だ。」と新吉は晝間火鉢の前で、お作がフラ／＼と居眠をしかけてゐるのを見つけると、其鼻の先で頼らしく舌打をして、ついで後へ引返してゆく。

お作はハッと思つて、胸を騒がすのであるが、

怎うなるともう手の着け様がない。お作の智慧では如何することも出来なくなる。よく／＼氣が合はぬのだと思つて、心の中で泣くより外なかつた。新吉の仕向は、全然掌裏を踊したやうになつて、顔を見るのも胸糞が悪さうであつた。秋の末になると、お作は田舎の實家へ引取られることになつた。其頃人並はづれて小さい腹も大分目に立つやうになつた。傳通院前の叔母が来て、例の氣爽な調子で新吉に話をつけた。夫婦間の感情は、絲が縫れたやうに紛糾つてゐた。お作はもう飽かれて棄てられるやうな氣もした。新吉はお作が此儘歸つて来ないやうな氣がした。お作は左に右に家の意嚮が然うであるらしく思はれた。

新吉は小遣を少し持たして、滋養の葡萄酒などを鮑の隅へ入れてやつた。

「其うちには己も行くさ。」

「眞實に來て下さいよ。」お作は出遅をしながら、幾度も念を推した。

六

お作が行つてから、新吉は物を取落したやうな心持であつた。家が急に寂しくなつて、三度三度の膳に向ふ時、妙に其處に坐つてゐるお作の姿が思出される。お作を毒づいた事や誹謗した事などを考へて、傷しいやうに思つた。何かの癖に、「手前のやうな能なしを飼つて置くより、猫の子を飼つておく方が、適に優だ。」とか、「さつさと出て行つてくれ、爾すれア、己も晴々

する。」とか云つて呶鳴つた時の、自分の荒れた感情が淺猿しく思はれた。けれど、わざ／＼お作を見舞つてやる氣にもなれなかつた。お作から筆の廻らぬ手紙で、東京が戀しいとか、田舎は寂しいとか、體の工合が悪いから來てくれとか云つて来る度に、舌鼓をして、手紙を丸めて、投出した。お袋に兄貴、從妹、と多勢一緒に撮つた寫眞を送つて來た時、新吉は、「何奴も何奴も百姓面してやがらア。厭になつちまふ。」と吐出すやうに言つて、二目とは見なかつた。

其頃小野が結婚して、京橋の岡崎町に間借をして、小綺麗な生活をしてゐた。女は伊勢の産とばかりで、素姓が解らなかつた。お作よりか三つも四つも年を喰つて居たが様子は若々しかつた。

「君の内儀さんは一體何だね。」と新吉は初めて此女を見てから、小野が訪ねて來た時不思議さうに訊いた。

「君の目にや何と見える。」小野はニヤ／＼笑ひながら、惡點さうな目容をした。

「解んねえな。如何せ素人ぢやあるめえ。莫迦に意氣な風だぜ、と言つて、藝者にしちや何處か疵皮の剝けねえ處もあるし……。」

「其様な代物ぢやねえ。」と小野は目を逸して笑つた。

小野は相變らず綺麗な姿をしてゐた。何やらボト／＼した新織の小袖に、ユツクリした茶博多の帯を締めて、純金の指環など光らせてゐた。持物も取替へ引替へ、氣取つた物を持つてゐた。